

# 「信仰を働かせて生きる」

マルコによる福音書 4:24-32

主任牧師：重田 稔仁

<メッセージ>

信仰を働かせて生きる

また、イエスは言われた。「神の国は次のようなものである。人が土に種を蒔いて、夜昼、寝起きしているうちに、種は芽を出して成長するが、どうしてそうなるのか、その人は知らない。土はひとりでに実を結ばせるのであり、まず茎、次に穂、そしてその穂には豊かな実ができる。実が熟すと、早速、鎌を入れる。収穫の時が来たからである。」更に、イエスは言われた。「神の国を何にたとえようか。どのようなたとえで示そうか。それは、からし種のようなものである。土に蒔くときには、地上のどんな種よりも小さいが、蒔くと、成長してどんな野菜よりも大きくなり、葉の陰に空の鳥が巣を作れるほど大きな枝を張る。」

マルコによる福音書 4:24-32 新共同訳

たとえ話に込められたイエス様の意図とその意味

イエス様はイスラエルで当時営まれていた大麦の栽培を例えに、神の国について語りました。当時イスラエルでは、大麦の栽培は、百姓が土を耕さずにバラバラと麦の種を大地に撒いてほったらかしにしても多くの実りがあったそうです。

(私の父は百姓でしたので、農業は汗水垂らした労働なしに成り立たないことを知っているので、俄かに信じがたいですが)

イエス様がこの譬えを用いて仰りたかったこと、それは神の国は人間の知恵や働きによってではなく、神の導きと働きによってもたらされるということです。

何故、イエス様は神の国についてこのように説いたのか、

それは当時、大多数のユダヤ人が、神の国は義人すなわち慈善を行う人々によってもたらされると信じていたからです。

“因果応報” 神の国～神の支配

因果応報的信仰の温床

バビロンによる捕囚体験と神殿破壊

セレウコスシリアのアンティオコス4世によるエルサレム神殿へのオリンポス神、ゼウス神の設置

因果応報

イスラエルの主なる神への背信が招いた裁き（バチが当たった）

イエス様は、神は人間の罪悪に対して罰を与え、人間の功德に祝福を報いるという人間中心的な信仰者の歩みから神の憐れみと恵みにより頼む信仰者の歩みへの転換を説いた

メジャー・トーマスの赤司

ランプのガラスをいくら磨いても灯火がなければランプは光りを放てない

中村穰さん

それさ、自分を大きくするような生き方ではなく、自分が小さくなり神様の恵みが大きくなるような生き方

クリスチャンは道徳的、人格的に磨かれ

苦難に耐えられる人間性を養う事よりも神様に信頼することを学ぶ必要があります！

それは、具体的には言うと…

自分の生きる目的、自分の問題に関心を向けるのではなく神があなたに抱いておられる目的に関心に向けて生きると言うことです。

そのような歩みを始めるとき、私たちは目には見えない、私たちが知らない神の働きに気づくことができます。その幸いについて先日、中野先生から教えられました。

中野先生の証

奥様が脳梗塞に倒れられて、改めて確信したそうです。

“闇の中で光りを見るときは、依然として闇はそこにあるしかし、光りもそこにある”

私たちの目には見えないかたちで働いてくださっている神を信じる時、人生の闇(病、苦しみ、虚しさと言った苦難)のなかにあっても私たちは、そこに神の憐れみ、慈しみを見出し、生きる希望、勇気、力、光りとして生きることができます。

牧師として23年間、働いてきました。

信仰を働かせることなしに牧師の働きは務まらなかったとつくづく思います。

余りに多くの方々の人生の闇の中を共に歩んで来たからです。

証し

離婚カウンセリング

みなさん、信仰を働かせて生きる幸いをこの1週間を味わわせていただきましょう。